

「徒然草」 兼好法師

成立 鎌倉時代末期

構成 初段の他 243 段で構成

特徴 ① 随筆

日本三代随筆

・ 枕草子（清少納言）

・ 方丈記（鴨長明）

・ 徒然草（兼好法師）

② 隠者文学の傑作とされる

作者は隠者（俗世との関わりを避け隠れ住む者）

③ 格段はそれぞれ独立した主題をもって書かれ、しかも広範囲にわたる。

仏教の修行や無常観、自然の美、人物、恋愛、人生論、説話的なもの、有職故実

※有職故実とは、朝廷や公家の礼式、年中行事などの洗礼

初段

つれづれなるままに、日くらし ずずりに向かひて、心に

うつりゆくよしなしごとを そこはかたなく書きつくれ

順接確定条件 シク活用連用ウ音便

ば あやしうこそ ものぐるほしけれ

花は盛りに

ナリ活用△連用中止法▽

花は 盛 り に、月はくまなきをのみ見るものは。

ク活用連体

副詞△限定▽

反語

桜の花は盛りなのをだけ、月は陰りもなく照り輝いているのだけを見るものだろうか、いや、そうではない。

マ行下二連用接助

雨に向かひて月を恋い、たれこめて春のゆくへ知ら

ラ行四段未然

雨に向かって隠れている月を恋い慕い、すだれをたれて部屋に閉じこもって、春の次第に老けてゆく様々を、知ら

打消連体へ準体法V

ぬ

も、なほあはれに情け深し。

カ行四段連用 強意連用  
咲き

ぬ

推量連体

べきほど

ないのも、やはりしみじみとした感じがして、情趣が深いものだ。まさに咲きそうな

存続連体

の梢、散りしをれ

たる

庭などこそ、

係結び

見どころ多けれ。

ク活用已然

歌の

桜の梢や、花の散りしおれている庭などこそ、見どころの多いものである。

格助へ目的V

ラ行四段連用

完了連用

過去連用

接助へ単純接続V

詞書にも、「花見

に

まかれ

り

ける

に

、早く散り

和歌の詞書にも、「花見に出かけましたところ、もうすっかり散つ

完了連用

過ぎ

に

過去已然

けれ

接助へ原因・理由V

ば

。」「とも、「障ることありて

ラ行四段未然

まから

てしまったので」とも、「差し障りがあつて出かけないで」

接助へ打消接続V

で

命令

書け

存続連体へ準体法V

る

は、「花を見て。」と言へる

などとも書いてあるのは、「花を見て。」と書いてあるのに、

反語

格助へ主格V

に劣れることかは。

花

の

散り、

月

の

格助へ主格V

傾くを慕ふなら

劣っていることがあろうか、いやないだろう。花が散り、月が西に傾くのを、惜しんで慕う習慣は、

ひは、副詞ラ変連体さること断定已然 接助へ逆説Vなれど、ナリ活用連体ことにかたくななる人ぞ、係結び

最もなことであるが、とくに情趣がわからない人は

「この枝、かの枝散り

完了連用に

過去終止けり。

今は見どころなし。」な

「この枝もあの枝も散ってしまった。今日は見どころがない。」

どは言

ふ

ハ行四段終止 婉曲連体める。

などと言うようだ。

よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ。男女の

すべての物事も、始めと終わりにこそ、興趣がある。男女の恋愛も、

けも、ひとへに逢い見る格助強意をば言ふものかは。逢は打消接続でやみ

ただ一途に關係を結ぶことだけをいうものであろうか。男女の關係を結ばないで終わって

完了連用に

過去連体し

憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜を独

しまった辛さを思い、はかない約束事を恨み嘆き、長い夜を独りで

り明かし、遠き雲居を思ひやり、浅茅が宿に昔を  
明かし、空の彼方に別れていった人を思いやり、浅茅の茂る荒れた家を

バ行四段連体へ準体法

しのぶこそ、色好むとは言はめ。

推量已然

思いやる人こそが、恋の情趣を理解するものというのであろう。

格助へ同格へク活用連体

望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、暁

満月で少しの陰りもない月を、千里の遠くまで眺めているより、

完了連体

近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやう

ク活用連体へウ音便

明け方近くになって待っていてやっと出てきた月が、とても趣深く、青みがかかっているような色で、

断定連体 接助

にて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、

ヤ行下二連用 存続連体

深山の杉の梢に見えている様、木の間越しの月の光、

ラ行下二連用 存続連体

うちしぐれたるむら雲隠れのほど、またなくあはれなり。

ク活用連用

さっとしぐれを降らせた一群の雲に隠れている月の有様のほうが、この上なくしみじみと趣深いものである。

椎柴・白樫などのぬれたるやうなる葉の上 **に** **きらめき**  
シイノキや、シラカシなどの濡れているような葉の上にきらめいている

存続連体へ準体法へ

**た**  
**る**

こそ、身にしみて、心あら

情趣を理解する婉曲連体

**む**

友もがなと、都

終助へ自己の願望へ

月の光は、身にしみているようで、情趣を理解するような友達がいればなあと、

ヤ行下二已然

恋しう**おぼゆれ**。

都が恋しく思われる。

副詞

**すべて**、月・花をば、

副詞へ指示へ

**さ**

副詞へ限定へ

**のみ目**にて見るものかは。

格助へ手段へ

一般に、月や花は、そう目だけでみるものだろうか、いやそうではない。

ラ行四段未然打消接続

春は家を**立ち去ら**で

係助へ並列へ

**も**、

月の夜は閨の**うちながら**も

接助へ状態へ

春は家から出かけなくても、月の夜は寝室の中にいるままでも、

ハ行四段命令存続連体

**思**  
**へ**

**る**

こそ、

シク活用連用へウ音便へ

いと**頼**も

**しう**、

シク活用已然形

**をかし**けれ。

思っているこそ、たいそう頼りになる感じがして興趣がある。

「好き人」

よき人は、ひとへに**好**け

力行四段命令

存続連体

**る**

さま**に**

格助へ状態

も**見え**

ヤ行下二未然

よき人は、情趣を愛好する様子にも見えないで、

打消連用へ連用中止法

**ず**

サ変連体

**興**

**ず**るさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、

↑よき人

面白がる態度もあつさりしている。片田舎の人は、

色こく、よろづはもて**興**

サ変已然

**ず**

れ。花の本には、ねぢ寄り立ち

しつこく、何事をも面白がる。花のそばには、ねじるようにして

寄り、あからめも**せ**

あ離ら目

サ変未然

**ず**

マ行四段連用

**ま**もりて、酒飲み、連歌して、

近寄り、わき目もしないで見つめて、酒飲み、連歌して、

はては、**大**きな枝、心なく折り取り

ナリ活用連体

**ぬ**

完了終止

泉には手・足

あげくの果てには、大きな枝を分別なく折り取ってしまう。泉には、手や足を

さしひたして、雪には降り立ちて跡つけなど、よろづのも

ひたし、雪の上にはふりたつて足跡をつけるなど、なににつけても

の、よそながら見ることなし。

距離をおいて、さりげなく見ることがない。